

新進・若手の活躍を期待して —アジアでバイオ産業振興を—

第12代会長 吉田 敏臣



日本生物工学会は、日本におけるバイオテクノロジー分野においてもっとも長い伝統を有する学会であり、同分野の科学・技術に関する研究の発展を推進し、バイオ産業振興に貢献してきた。今後さらに人類の豊かな生活を支えるために、種々の生産活動と環境保全のために尽力することになろう。21世紀はアジア・アフリカの世紀といわれるが、アジアの一員としての日本は、これまでの欧米中心の体制から飛躍し、新時代にふさわしい新しい展開を図ることになる。日本生物工学会もアジアを重視する必要のあることは多くの人が認めているところである。

2001年に、大阪大学と日本生物工学会が連携して、全国から多数の研究者ならびに東南アジア諸国の関係者の参加を得て、科学技術振興調整費「我が国の国際的リーダーシップの確保」において、「熱帯生物資源とグリーンケミストリー戦略」の課題で、国際共同研究を実施した。その結果、下図に示すように、韓国のKSBBとともに、東南アジアの微生物学ならびにバイオテクノロジー分野の学協会ネットワークが形成された。

国際会議APBioChEC (Asia Pacific Biochemical Engineering Congress) が1990年以来20年間継続的に開催されてきた。この歴史を背景に、同友学会KSBBの尽力によって、AFOB (Asian Federation of Biotechnology) が2008年10月に形成された。そして、APBioChECの後継会議として、第1回ACB (Asian Congress of Biotechnology) が2011年に上海で開催された。AFOBの参加国は、現在中国、インドを含めて13ヶ国(地域)で、事務局は韓国仁川市にある。日本から、日本生物工学会の他、化学工学会バイオ部会、環境バイオテクノロジー学会が参加している。

バイオ産業振興はアジアの発展に大いに貢献すると期待され、産学官連携で世界に鑑たるバイオ産業発展の実績と40年の発展途上国援助の経験を有する日本は、他

者の真似のできない貢献ができる。それを実現するためには、経験豊富な産業人・技術者がアジアのバイオ産業振興に活躍するとともに、若手研究者・技術者を育成することが必要である。それら若手は、優秀な科学者であるとともに、アジアで国際交流や共同研究を企画し、組織を先導できる研究者であることが求められる。

本学会は、このような活動に大きな貢献を為すものと期待されており、我々会員は斯界の発展のために先端的先導的活動をもって応えたい。そのとき、我々は科学者あるいは知識人として、覇権主義的な考えに支配されたり独善的となったりすることなく、高い品格と広い度量をもって全世界の人々と協力し、多くの人々に幸福をもたらすよう科学者・技術者としての貢献を為さねばならないと自戒する。

日本生物工学会の会員諸氏が広くアジアで活躍し世界の人々によりよい生活を提供するために大いに貢献されることを期待する。

The Network of the Societies for Microbiology and Biotechnology (SMBnet) in Southeast Asia, 2002

